
≠

如月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

≠

【Nコード】

N9477A

【作者名】

如月

【あらすじ】

舞台は黒の組織壊滅後。工藤新一（江戸川コナン）はある日夢を見た。灰原が完全な解毒薬を完成させ、彼は元の姿に戻るべく薬を飲み込んだ。その直後に！？・・・そして事後。高、小、2つの日々が始まった。

P r o :ある日見た夢（前書き）

新蘭、またはコ哀が苦手な方は注意してお読みください。

CP要素があるときはサブタイトルにどちらなのか書くようにはするつもりですが、両方出てくる場合があります。

※キーワードはちゃんと見てください。

Pro..ある日見た夢

・ ・ ・ なんか ・ ・ ・ 遠くで目覚まし時計の鳴ってる音がするような ・ ・ ・ 。

……って、ほんとに鳴ってんじやねえか！

がぼつと起き上がり、東の高校生探偵・工藤新一は時計をバシッと叩いてやかましく鳴り続ける音を止める。

お？

そこで何かに気付いた。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

「……っか、鏡！」

バタバタと向かい、鏡を覗き込んでみるとそこに映るのは確かに工藤新一だった。

だと思った。けれど、

「えーっと？俺は解毒薬なんて飲んでないよな？すると夢か。そう
だ夢だ。てか幼児化ってありえないよなそうだよな！」

言った次の瞬間、鏡の中の工藤新一がぐにやぐにやと変形しはじめ
た。

「・・・う・・・・・・っ!?!?」

自分が形を変えていくという光景に思わず顔をしかめると、いつの間にか鏡の中身には江戸川コナンの姿があった。

「な・・・」

何故だかは分からないが、近づかないほうがいい気がして一歩後退してしまう。鏡なのだから普通はコナンも後退するはずだが、鏡の中のそれは逆に近づいてきた。

そして、

「・・・・・・・・・・・よお。俺」

不敵な笑みを浮かべてこちらを見てくるのだ。

「・・・・・・・・・・・っ!?!?!?」

またがばっと起き上がる。慌てて姿を確認すると、今度は江戸川コナンだった。

「はぁ・・・・・・」

汗をかいているのが分かった。どうしてもため息が出てしまう。

「・・・コナン君?そろそろ起きないと遅刻しちゃうよ?」

蘭がドアを開けて少し心配そうに言ってきたので、とてもだるかったがなんとか言葉を返した。

「はあい・・・今行く・・・」

まさかその悪夢をすぐ後に思い出すことになるうとは、いくら名探偵でも思いもしなかったらしい。

P r o : ある日見た夢（後書き）

キリ・・・いいかなこれ。一応区切ったんですが・・・；

新「・・・なんだよこの夢」

作「おや？駄目かい工藤君」

駄目な方すみません・・・。

最後に。「仕方ないな一回見ちゃったから最後まで付き合っちゃってもいいかな」という心優しい方がもしいた場合は今後よろしくお願いします。

One:そ、そうなの?;

.....ん?違和感?

今俺がいるのは帝丹小学校1年B組。というか、自分の席。

席替えが少し前にあったので、今は右隣に歩美、その後ろに灰原。

俺の3つ後ろが光彦、元太は少し離れて俺の列から4列ほど離れた所の前から4番目。因みに俺の席は一番前で一番窓寄り。ちよつと歩かないと席につけないから困るんだよなあ.....。

.....。

そうか分かった。違和感があるのはもう黒の組織におびえる必要がないからか。

そう、組織は約1ヶ月くらい前に壊滅させた。それに服部を巻き込んでしまったとか何故だか怪盗キッドが絡んできたとかいろいろな事はあったのだが、ここでは面倒なので割愛しよう。

というか、作者が面倒くさがりなだけですなごめんなさい。

.....話を戻す。

灰原が言うには、解毒剤のデータが揃ったらしい。

今まで以上に解毒薬に専念してるから博士が心配してたな。

.....というか、灰原本当に大丈夫なのかあ?今まで以上ってことはあいつ絶対に寝不足だろ。

「あら、珍しく暗いわね。どうしたの?」

ついさっきまで本をじっと見ていた灰原が(しかも当たり前ではあ

るが後ろから」話しかけてきたため「うおあっ!？」と声をあげてしまった。

「・・・何?その反応」

「あ、悪い。ちよつと考え事しててな」

冷たい視線を感じながら答えると、彼女はため息をついた。

「・・・組織のことも考えてたの?何処の誰だったかしらね?心配そうにしてる人に『もう大丈夫だ』なんて自身ありげに言ってたのは」

ん?灰原、なんか呆れてる顔じゃない・・・?

「はは・・・。組織のことじゃねえよ」

「へえ、そんな夢見たの」

「ああ、もうワケ分かんなくってよお・・・」

コナンは夢のことを話し終わった後ゴンツと額から机にぶつかった。

「ああ、工藤新一といえば、

・・・解毒薬、完成したわよ」

ばっ!と振り返って灰原を凝視する。

「帰ったらお母さんたちに頼んでコナンを引き取ってもらったりしなきゃね・・・」

下校、今日は探偵事務所に着くのが早かったような気がしたのは気のせいだったのだろうか・・・。

One:..そ、そうなの?; (後書き)

どうも。如月です。

-
-
-
-
-
-

ごめんなさい。

これもう、怒られてもおかしくないんじゃないかなろうか……；；；

T W O..やっとか・・・

博士宅

トゥルルル・・・トゥルルルル・・・

『はい、工藤です』

「もしもし、その声は母さんか。新一だけど」

『新ちゃん？どしたの急に』

『葉ができた？』

「ああ。コナンを引き取らないといけないだろ？だからこっち来てほしいんだ」

『久しぶりに文代ちゃんの登場かー頑張っちゃお。じゃ、明日の9時らへんにそっち行くねー』

「おう」

電話を終え、ふうっと息を吐く。

「あら、もう終わったの？」

「ん、ああ。母さん、今回は用件言ったらすぐ切ったからな」

「しかし、ついに新一が元に戻る日が来たんじゃないか」

「小さくなって約1年か。長いんだか短いんだか。それより・・・。ほんとにできたのか？」

「失礼ね。そんなに信用ないなら私が貰うわよ」

「ははっ、冗談だよ冗談。これでもけっこう信頼してるんだからな？」

灰原は一瞬驚いたような照れたような顔をしたが、「そ、そう」と言うそばたばたと自室へ戻っていった。

翌日。

「え？ご両親から電話が？」

「うん。よく分かんないんだけど仕事が片付いて一緒に住めるって言うってね、9時くらいに迎えにくるんだって」

「そっか・・・」

蘭、寂しそうな顔してんな・・・。

って、何で俺は新一Ⅱコナンだって言わないんだ？

「どうも今までお世話になって・・・」

「いえ・・・。あ、そうだこれ・・・今お礼としてくださった通帳、あっても父が麻雀とかに使うだけなのでやっぱりお返ししますね」

「あらそんな。1年くらいお世話になってるのに・・・」

結局、通帳は母の手に。

「ちょっと悪いわねえ・・・」

蘭はそういうところはしっかりしてるからな・・・。

工藤宅

「・・・これよ。完璧なはずだわ」

「わー、ついに戻るのね新ちゃん」

・・・母さん、何故帰らない。

「なんか、実感ねえな」

というか、飲んだら後悔しそうな気が・・・。

けれど意を決して解毒薬を飲み込む。

・・・バクバクと鳴る心臓の音と、母さんや博士、灰原の心配そうな声を聞きながら、江戸川コナンこと工藤新一は気を失った。

T W O : やつとか・・・（後書き）

どうも如月です。

やっと飲み込みました江戸川さん。次はついに題名に関連した内容になります。にしても遅っ。

区切りが早すぎなんだろうか？文字数合わせようとするときすぐ終わる・・・。

皆さんどう思いますか・・・。

Three..「Ⅱ」と「≠」

.....ん。

あれ？俺は確か灰原が作ってくれた解毒薬飲んで.....

「! ! っと.....?」

起き上がると、皆は何か困ったような表情をしていた。

「よお、俺」

横から声がする。声の主を脳が確認して言葉を返した。

「ん、よおコナン」

.....。

! ! ? ?

「コナン! ! ?」

なんでここに? ってか俺、元の体だよな! ! ?

ぱつと姿を確認するが、何処から見ても工藤新一。

「は、灰原! 説明! !」

慌てて灰原に視線を移す。

「はいはい.....。それにしても工藤君、あなたよっぽど不思議な体質なのね。」

いえ、今まで不完全の解毒薬を何回も飲んでいた後遺症か何かかしら?」

「……すみません、早く説明をください灰原さん。」

「……すると？　なんか知らんが解毒薬飲んだ俺が……光って？」

「んでその光が引いたと思ったら俺と江戸川コナンがいて？
……今に至ると？」

「なんだそりゃ。」

「ええ。ちよつと信じられない話だけど江戸川君は考え方も記憶も性格も何もかもあなたよ。そして……。」

「……あなたが同一人物だったとは絶対に口外してはいけないわ」

灰原が真面目な顔で言うが、新一とコナンはきょとんとして言い返した。

「「なんで？」」

その何も察していない返事が彼女を怒らせたらしい。冷たい視線に突き刺されながら説明された。

「あなたたちは今完全なクローンと同じになるわ。現在そこまでクローン技術が発展してるとは思えないし、もしばれたら……そうね、

実験台として解剖されるのがオチよ」

冷たい視線に冷たい声。2人は否が応でも「はい分かりました口外しません」と言わざるをえなかっただろう……。

・・・なんだこれ。なんだよこれ。

ある日突然生まれた「≠」。

いままでイコール(＝)だった新一とコナンの関係に、いきなり斜線が入ってしまった。

・・・当然、コナンは探偵事務所へ帰ってきたことを言いに行く。

「コナン君・・・？ど、どうしたの？ご両親は・・・」

「あ、うん・・・なんかまた、仕事が急に入っちゃって離れて暮らさないといけなくなって・・・」

あ、そういえばね、新一兄ちゃんと偶然会ったよ！事件解決して帰れるって言ったから一緒に帰ってきちゃった！！」

「・・・え？」

「よ、よお・・・蘭」

驚いている蘭に新一がひよこりと顔を出すか

無反応。

あれ？

「・・・まあいいわ。お仕置きは明日登校時にたっぷりしてあげる。今はコナン君がいてちよつと無理だからね」

お帰りなさい。今までで一番の笑顔でそう言い、蘭はコナンを引き連れて家の中に戻っていった。中で「今度は新一兄ちゃんの家に住むことになったんだー」とコナンの声が聞こえてくる。

・・・2人が家に入ったということはつまり、笑顔に見惚れて放心状態の新一は放って置かれたということになり、灰原、博士の2人は引きずって家に帰ることになったとかなんとか・・・。

Three: 「＝」と「≠」 (後書き)

ぐはあっ!!

も・・・文字数が・・・・・・・・。。。

次回はCP要素がそうです・・・というか、でます。
苦手な方は要注意を・・・

コ「・・・なんか話の展開見え見えな気がするんだが」
作「あ、やっぱり? ; ;」

※修正しました。説明をけっこう省略するクセみたいなのがあるようなんです、やっぱり話の展開が速すぎるのでしょうか?

Four:告白？(前書き)

新蘭です。

・・・新蘭です。

帰るか帰らないか、ここで決めてからお読みください

Four:告白?

翌日。

「新一く早く来ないと置いてくよ〜?」

「っだー!わーったからそこで待ってるー!!」

バタバタ、と慌しく家を出る。

元に戻って始めての登校。うん、確かに嬉しい。今まで見上げなきゃ見れなかった蘭の顔が、ちょっと横を向けばすぐに見えるんだから。

なんだが……………。1つ、俺にはどうしても気になることがある。

「なんでお前までいるんだよ…………っ!!!」

「えー?だってボクの行ってる帝丹小学校もこっちだよー?」

…………ムカつく。すっげえムカつく。

「お、灰原じゃねえか」

しかも殴ろうと思ったら走られた…………。つく…………。

「…………江戸川君、工藤君呼んできてくれる?」

「あ?自分から行きゃあいいだろ?」

「2人に言っとく事があるのよ…………」

「2人とも、昨日あなたたちが探偵事務所に行く前に私が言ったこと、覚えてるんでしょうね?」

「ああ、俺はまだ灰原がいるからいいけど、工藤新一の方はフォロ―するやつがいないんだから注意して行動しろってあれか？」

「そう。暴れられて怪しまれたりすればまた多くの嘘をつかなきゃいけないでしょう？それはあなたたちももう極力避けたいだろうと思うし……」

言う灰原に、新一は気楽に返す。

「わーったわーった。暴れなきゃいいんだろ？」

「あなたが一番心配なのよ工藤君」「おめーが一番危険なんだろうが」

「……同時に小1につっこまれるって、悲しいと思いませんか皆さん。」

下校時

「じゃーねー！2人とも！」

園子。当然のごとく教室で会い、何度も怒られ何度もからかわれた。……まあ、怒りの混じった問いや説教の方が、からかいよりも何十倍也多かったのだが。厳密には、からかうのは主にクラスメイトの方であって、園子が中心ではなかった。……珍しい。

……でもあいつ、蘭が絡むと答えにくい質問ばっかするんだよねあ。

大量にある問いの中で一番きつかったのが、「蘭のことどう思ってるの？」。

はっきり言って、園子は蘭が絡むと性格が変わる。……蘭の幸せ

のためだったら、権力でもなんでも惜しみなく使うんじゃないか、あいつ。

本当にやりそうで怖いな、と新一は苦笑した。

しかし・・・『蘭のことどう思ってるの』・・・・。ねえ。

好きに決まってるじゃねえか。それ以外の何物でもないと思う。でも、多分あいつだってそれは分かってるだろう。

つまり本当に言いたいのは、

『蘭を大切に思ってるし、好きだって言うんならちゃんとそれを蘭に伝えなさい』

・・・ってわけだよな。

園子の言うことは正論だ。

自分も、蘭が好きだってことを隠すことに意味はないと分かっている。

・・・。じゃ、言うか。今。

「あのさ、蘭・・・言いたいことがあるんだけど・・・」

「？何、新一？」

「蘭のこと・・・ずっと好きだったんだ・・・」

「・・・・」

蘭が黙り込んでしまう。

・・・まあ、無理もないよな。1年待たせてたわけだし、何よりもあまりに唐突すぎるからなあ・・・・。

「いや、今返事してくれって言うわけじゃないぞ？お前だって考える時間がほしいだろうし。・・・ただ、気持ちは伝えておきたいなと思ったからさ」

言うのと、蘭は頷いてくれた。

「じゃ、行くぞ」

そう言って新一は蘭の手を牽いていった。

速く歩いたわけじゃないのに、少し歩いたと思ったらもう道が分かれるところまで来ていた。・・・もっと一緒にいたいのが、我俣を言うわけにもいかない。

「・・・もうこんなとこまで来たんだな。じゃな、蘭。確かに探偵事務所はすぐそこだけど、気をつけて帰れよ？」

「うん・・・」

新一が蘭の手を離すと、蘭が俯きながら言う。

「あのね、新一」

「ん？なんだ？」

「・・・さっきの、告白の返事なんだけどね」

顔を上げて、新一が一番弱い、とびきりの笑顔で言った。

「私も、新一が大好きです」

・・・あ、ちょっと涙目だ。不意に言われた言葉に少々驚きは持ちながらも、新一はそんなことを考える。

「好きでもなかったら待つわけないでしょ？1年よ1年。『待っててくれ』って言われたとはいえ、私、それだけの理由でそんなに長く待つ自信ないし」

続いて言われた言葉に、はは……。と新一は苦笑して、蘭と同じ、笑顔で返した。

「そっか。……ずっと待たせてごめんな。でも……ありがとう。」

あ、あと……。『ただいま』」

「言ってなかったからさ」

俺が言うとなんは一瞬驚いた顔をして、

「うん」

またすぐ笑顔になった。

Four:告白? (後書き)

告白って言うのかこれー!

ごめんなさい「ただいま」言わせるの忘れてました・・・。

蘭さんは強いけど脆いと思うんです。『待っててくれ』だけじゃくじけそうなくらい。好きだから信じてて、だから待ってていられるんじゃないかなあ、と。

「短い」との意見が複数あったのに加え、自分でも修正はしたいなーと思っていたので修正しましたorz

ごめんなさい。新蘭かどうか云々の前にやっぱり短かったですね・・・。

F i v e .. カイワ (前書き)

C P 要素なしですが、完全に新一 ≠ コナンです。

Five..カイワ

現在、俺江戸川コナンは「工藤新一の家に居候」ということになっている。

蘭と俺と・・・新一の3人の登校が始まってもう数ヶ月。

体が小さくなったら小1で、俺と新一に分かれたのが小2になりかけのときだったから、今俺は小2の半ばよりちよつと前らへん。つまり新一と蘭は高校3年・・・かな？

・・・しかし・・・疲れた・・・。。。。。

「・・・・・・・・ただいま・・・・・・・・」

「なんだ、思ってたより帰りが遅かったな」

少年探偵団への依頼が入ったために出掛けたわけだが、単なる猫探しだった。そこまではいい。問題はその猫だ。

ぽふつとソファーに倒れこむ。

「あゝ・・・推理するよりか何も手がかりの無い状態で猫探す方がすつげえ疲れるよな・・・。

つかなんだよあの猫・・・・・・・・あっちこっち逃げやがって・・・・・・・・」

いつもは弱音なんて言わないけど、流石に今回は疲れた・・・・。いたいどれだけ追いかけまわしたんだ・・・・。

・・・・コナン、相当疲れてんなー。

「ああ・・・推理の方がよっぽど楽だと思う。てか、猫探して事

は元太たちご立腹だったんじゃないか？あいつら血とかが駄目なのに本格的な事件ばっか好むからな」

しかし……コナンの今日あったことってのを聞いてると「工藤新一≠江戸川コナン」ってのを実感しちまうよなあ……もう同一人物じゃないんだな……ってよ。

思っていると、不意にコナンの声が聞こえてきた。

「……なーんか、嫌でも『≠』を実感しちまうよな……」

なんだ、コナンも同じか。

「奇遇だな。俺も同じように思ってたところだ」

……。

「『≠』があってもやっぱ考えることは同じなんだな」

考えることがまったく同じだったからか、それとも同時に声が出たからか、

部屋に笑い声が響いた。

Five..カイワ（後書き）

どうも。このごろ「話が分からない」という意見がでた小説「≠」を書いている如月です。

やっぱり情景描写が少なすぎでしょうか？

自分で書くと頭で想像できてゐるから気付かない点も多いかもしれませんが。「話の展開速いよ!」というときは言ってもらえないでしょうか。

そしてえーっと・・・4話の「告白」とかいうのは修正・・・どうしてもしてくれと言われればしますが、自分からはしそうにありませんごめんなさい。

S i x :: 灰原さんと俺? (前書き)

コ哀・・・?というか、コ↓哀風味・・・?;

なんだかもう、わかりませんすみません O r Z

期待だけはしないでくださいね。絶対に。苦情なんて受け付けません!
(蹴)

S i x :: 灰原さんと俺？

・・・なあ、

君はどうしてそんなに拒み続けているんだい？

自らの幸せを。

まるで何かの罰のように。

・・・俺のせい？ 皆のせい？

君はいったい何が怖いの？

俺はもういいと言ったよね？ 誰もが君を責めたてられるほど酷くないってことくらい知ってるよね？

君は幸せになっていいんだよ。

・・・君は幸せになれないの？

でも・・・。

君には、幸せになってほしいんだ。

灰原哀。俺、江戸川コナンのクラスメイト。

俺と工藤新一が分離して、もう1年。俺は今とてつもなく気にかかっていることがある。

ちなみにもう掃除も終わって、あとはHRが終わって帰るだけ。

灰原、・・・また作り笑いかよ。

分からないとも思っているのか、それとも分かっているやっっているのか、彼女は笑うことがなくなった。以前から多くはなかったものの、近頃は全く笑わない。呆れは確かに表すものの、俺はそんなの笑顔だとは認めない。

・・・何なんだよ・・・。

悩みでもあるなら相談すればいい。何処か不安になるのなら、人に寄りかかって構わないのに。皆きつと受け入れてくれる。博士、

歩美、元太、新一、蘭、

・・・俺。

何なんだよいったい・・・。

全てを1人背負い込んで。何が楽しい。

不安を無理矢理閉じ込めて。それで不安がなくなるか？

そんなに幸せになりたくないのか？なっているんだぞ？お前は――

「コナン君・・・、早く、帰ろ？」

はっ、として横を見る。歩美が心配そうに見下ろしていた。光彦も、元太も、・・・灰原も。

「あ、ああ悪い。ちょっと、考え事してたから」

そうごまかしてガタ、と席を立つ。・・・ちよつとだるいような気がした。

ただずっと座ってたからだと理由をつけて、江戸川コナンは少年探偵団と一緒に自分の家に帰っていく。

「じゃーなー！！！」

ここで分かれ道だから歩美たちはここで俺たちとは一緒には歩けない。あとは、灰原と俺がほぼ同じ距離同じ道を行くんだよな。

もうずいぶん慣れたこの動作。体が事務所のほうに勝手に動くなんてこと、もうなくなつた。

まあ、1年だしなあ・・・。

「じゃあね、江戸川君」

「・・・あ？」

いつの間に家の前に・・・。

「あ、ちよつと待てよ」

・・・ん？

「・・・何？ 私博士に夕飯作らないといけないんだけど」

「あー……いや、悪い。何言おうとしたんだか忘れた」

「（……あなた頭大丈夫？）じゃあ帰るわね」

……あつれ、何言おうとしたんだっけ。俺。

「……ただいま……」

ガチャ、とドアを開けると、やっぱりそこには工藤新一がいた。

「……どした？元氣ねえな」

新一が心配そうにしゃがみこむ。

「んー……」

だるそうにうなつて、コナンはソファーに転がり込んだ。

「……つまり、お前は灰原が笑わないのが気になって仕方なく、おまけになんで呼び止めたのか分からない、と」

「んー……」

やる気のない声が出てきた。新一がピク、と反応はしたものの、わざとではないと察してくれたのか何も言われない。

「「んー……、なんで？」」

……名探偵2人組も、流石に恋には鈍感らしい。

S i x : 灰原さんと俺? (後書き)

わーいシリアスにしようと思ったら最後がギャグになっちゃったー。
・・・にしても。

10日間の放置、すみませんでした・・・。
しかもあまり追加されないし・・・。
怒るなら怒ってください。自分が完全に悪いですから。
本当にすみませんでした・・・。

S e v e n :: 君は今・・・ (前書き)

なんだろう。難しいですねCPって。

なんだろう。新蘭＋コ哀？ いや、新蘭＋コ↓哀かも。

・・・それでも見ますか？ いつもと同じように期待はしては駄目ですよ？ いいんですか？

S e v e n：君は今・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

えーっと、工藤新一さん？

あんた、やっと・・・だなんて正気ですか。

呆れるしかないな、こりゃ。というか、人いったいどれだけいる・・・。

「おい、何してんだよコナン！！」

突然の声に不思議と驚くことなくゆっくりと振り向いたのは、工藤新一と分離したことを隠し続けて約3年、つまり小5になる江戸川コナン。

「あんだよ元太」

声の主を確認してみると、それは少年探偵団の1人、小嶋元太だった。

「どうせ花嫁様のことも考えてたんでしょう？それとも花婿様かしらね」

そして右から灰原。相変わらずだな。こいつも、探偵団も。

思った後、コナンの思考は数十分前に戻っていった。

「おい・・・すっげえ遅いよな？新一」

「だからそれはもう言わないでくれえ・・・」

「わー！蘭お姉さんきれー！！」

「ほんとですね！」

「新一兄ちゃんはなんだか知らねーけど固まってねえかあ？」

「そうね・・・彼こういうのは苦手そうなものね。」

誰かさんに思いつきからかわれたみたいだし。おっと、これは関係なかったかしら」

おっと、そうこうしている間に新郎新婦が来たらしい。・・・いろいろなかやるんだろうけど、そっちには興味ないしなあ・・・。
俺がここに来た理由は新一をからかうためと、蘭を祝うためと、あとは・・・・・・・・・・・・・・・・。。。

ブーケブーケと周りがざわついている。おっちゃんが号泣している。新一（というか俺のでもあるのだが）の両親が温かく見守っている。警視庁陣もだ。服部、和葉、探偵団は新一の動きがギクシャクしていたのを見て何か色々議論している。おい服部、お前後で新一に殴られても知らねえぞ。

ブーケ。女性がきゃあきゃあ言う、あれ。

俺はこれだけが目当てだ。はつきり言って、これのためだけにここに来たと言っても過言じゃない。

・・・あいつら二人が投げる相手は園子か、歩美か、・・・俺がここに理由となってるやつ。だよなやっぱ。

さあ来るか、と思ったとき、新一が蘭に何かを呟いた。蘭は笑顔になって、ブーケを投げてくる。

やっぱりな。

飛んできた先には、もちろん灰原の上。歩美たちが蘭をよく見れるようにと周りが気遣ってくれたのか、俺たちは前のほうにいたから、遠すぎるなんてこともあるわけない。

世界が全て遅く見える感じがした。灰原がちょっと驚いてる顔をして、皆も同じ顔をした後、今までで一番の笑顔に変わって。新一と蘭は優しく微笑んで。あと数cmで灰原にブーケが触れるところまできて。

世界は元の速さに戻った。かと思うと、ほら。

もうブーケは灰原の腕の中。

「え・・・・・・・・」

灰原は1人驚いた顔をしている。周りの者たちは皆笑顔で彼女を見ている。

そして本人は、ブーケをぎゅっと抱きしめて優しい顔になった。

俺は、どうしても灰原がブーケをもらって、喜んでる所を見たかったんだ。

じゃ、俺の目的は達成、と。しかしこの人だから抜けんのめんどくさ。どうやって帰れてんだこれ。阿呆か。

でもまあ、灰原の笑顔が見れたからよしとするか。と小さなホームズは思った。

君の笑顔は周りの笑顔。

君の笑顔は、ボク笑顔。

工藤新一と毛利蘭の幸せな姿を見届けて、ブーケまでもらった。加えて周りが皆優しく笑ってくれる。

・・・灰原哀。君は今、幸せですか？

江戸川コナン。彼がこの気持ちを抱くその理由に気付くまで、あと少し。

Seven: 君は今・・・ (後書き)

わーいコ哀が書けるー。次回からコ哀が書けるぞー。

最初はコ↓哀とコ↑哀だけどきつとコ哀にしてみせます。きつと。きつと・・・。orz

もし読んでくれた方、ありがとうございます！

E i g h t : 5年生の僕ら（前書き）

新蘭要素は出てきません。

けど、CPっぽい要素は出てきます。多分。

Eight : 5年生の僕ら

今、俺たち少年探偵団は帝丹小学校5年生。何が言いたいか。といううまく説明はできない。・・・こらそこ、なんだよそりゃとか言わない。

5年になるのだから、クラス替えというものがあるわけだ。それだと必然的に席替えも起こるわけだ。

ちなみにクラスは光彦がA、元太がC、歩美、灰原、そして俺江戸川コナンがD。

4年までは腐れ縁と言うのか何なのか、ずっと同じクラスだったが今回で見事にバラつきが出てしまった。

でも、悪いけど俺は気にしてない。確かにクラスが違ってたのは寂しいところもある。けど、会えないって訳じゃないし、それに・・・

なんでだろう。灰原とクラスが分かれなかったのがけっこう嬉しい俺がここにいる。

そして、今度は席が指定された。

・・・。。。。あれ？

なんだこれ。なんだこれ。え？誰かの陰謀でもあるんじゃないだろうな。

俺の左隣・・・灰原。おれの右隣・・・歩美。

・・・。。。。これ、さあ。2年のときも4年のときもなったこ

とがある感じがするんですが？ねえ。これ、どう説明してくれるわけ？誰？この席順にした人。

いや、べつに嫌なわけじゃない。むしろ嬉しい。でも、左にある・・なんていうか・・・気配？を感じると心臓がバクバクいくような気がするってことは俺は病気ですか。

・・・そんなこんなとしている間に、やっぱり時は過ぎていく。

「哀ちゃん、一緒に帰ろう！」「哀ちゃん、おはよう！」いつも笑顔で言ってる歩美はいろんな女子に人気だった。まあ、男子にも、なのだが。だけど本人は気付いてない・・・か。ある意味恐ろしい子だと思う。彼女。

・・・・でも、灰原だって男子にけっこう人気があるのを俺は知っている。

だから2人の間にいる俺は男子の視線に混じった殺気が気になって授業まともに受けてないんだよな。俺は以前勉強してるからいいものの。・・・お前ら、テストで悲惨な点数になっても絶対に知らねえ。俺は絶対に責任とらねえ。

というか、さあ。ただでさえ左からくる気配で気を取られてるっていうのに、殺気なんかで汚すな・・・じゃなかった。さらに気を散らせてくれるな。もっと集中できん。

ってか、灰原も灰原なんだよ。なんで俺にはしねえことを他の男子にはするんだよ。んなことしてっからあいつらが調子に乗るんだろ！俺にだけしてあいつらにしねえことは大歓迎だけだよお！！

「じゃあ・・・江戸川君。この問題解いてみて」

つと・・・今授業中だった・・・。。。。。。まあ、これくらいなら考え事しながらでもできると言えばできる範囲なのだが。めんどくせえ・・・。だがそんなこと言うわけにはもちろんいかず、仕方なくコナンは黒板の前に移動した。

「正解。じゃあ席に戻っていいわよ」

ガタ、とコナンは席に戻る。・・・やっぱ気配が気になります。どうにかしてください灰原さん。抑えるとかできないのか？

って、なんで俺はそんなことを思ってる。理由を述べよ江戸川。分かれば回避できるかも知れんぞ江戸川。さあ、述べるんだ江戸川コナン！

とは……言ってもなあ……

ん？ ・ ・ ・ あれ ・ ・ ・ ？ もしかして ・ ・ ・ ・ ・ ○

・ ・ ・ ・ ・
そっか。　　・ ・ ・ ・ ・
　　　　　　・ ・ ・ ・ ・○
そうかも。

E i g h t ∴ 5年生の僕ら（後書き）

のろのろペースなこんな小説を見ている方、いたら本当にありがとうございます。
うございます……。如月です。

コ哀だー。コ↓哀だー。

……。次回ですが、……。。

自分はどうしてもコナンをいじめたくなるようで……。愛ゆえ！

（殴

Nine..ある日曜日（前書き）

な、長らく放置してすみません・・・。

そしてまた謝らなければならぬのですが、ラブーなコ哀はもうちよっと先になりそうです・・・I l l o r z

もし読んでくださる方、期待等は一切なしでお願いします。

そう思ったけど起きねえし。起きろ起きろ言ったら聞こえてきたのはお前の寝言。

で、目覚まし時計はなんで知らんが元から4時30分にタイマーセットしてあったから、ついとして耳元で鳴らしてやった」

「て、てめえ・・・・・・・・・・」

なんでもないように言う新一にコナンは恨みと怒りの視線を投げかける。

まあ、起こしてもらったのには素直に礼を言うべきではあるのだろうが・・・・・・・・。何か納得いかない。新一本人の顔自体納得いかない。なんだよその目。

でも・・・・・・・・眠い・・・・・・・・。思考があまり働かなくて怒る気力が失せた。

・・・・・・・・とにかく、まずは食事を済ませなければならぬだろう。

ほらよ、と新一が置いた朝食を胃の中に押し込んで、コナンは時計をちらりと見た。

5時・・・・・・・・数分前。

コナンはぼっと立ち上がり、ドアの方へ駆けていった。

「じゃあ行ってくる!!」

「何処に？」

「隣に決まってるんだろ！」

「そうか・・・・はあ!? まだ灰原たちは寝てるだろ!？」

新一の言葉なんて気にせず、隣、つまり灰原のいる博士の家へ向かう。

「わりー博士！ちよつとじやまするぞ！」

灰原！

バン、とドアを開けて灰原を呼ぶ。金曜の放課後に「日曜にそっちに行く」と言っておいたから、寝ているなんてことはない・・・だらうな・・・。

「何・・・？こっちに来るとは確かに聞いてたけど・・・早朝だなんて言われてないわよ」

あ
・
・
・
・
・
・
・
・
○
起きてた。

灰原はまだハジマ姿で眠そうに目をこすっている。けれど、コナシは「あんま時間ねえからさ」と彼女を急かし、すぐに着替えてくるように言った。

むー・・・と不満そうな顔はしたものの、彼女はその言葉に従ってくれた。

てくてくと歩いていく子供が2人。

「寒くねえか？」

「ええ．．．にしても何？私眠いんだけど．．．．．」

「いいからいいから。もうちょつと先だけど、あと10分もしないうちに着くからよ」

コナンが哀の手をひいて何処かへ向かって歩いている。何処へ行くのか、どんなに聞いても決して彼は答える素振りを見せなかった。

す、とコナンは自分の時計を確認する。5時30分、といったところか。

「————ほおら、着いたぜ!!」

Nine..ある日曜日（後書き）

コ..あれれ？なんか途中で切れちゃってるよねえ？（にっこり）
如..ごめんなさい.....;

何処に着いたんでしょうね...ほんと...。orz

次、かつこいいコナンが好きな人は見ないほうがよろしいかと...
思われ.....ます。

他の注意書きは次の話の前書きで...。

T e n :: 告白。けれど・・・（前書き）

ごめんなさい l i l o r z l i l

ここから先は如月の好きな要素がてんこ盛りです。何があっても恨まないでもらえませんか o r z
そして

・ かつこいいコナンじゃないと嫌だ

・ 哀がコナンに告白されたのに断るだなんて許さない

という方々、要注意です・・・。

※一応、コ↓哀・・・のつもり（殴

Ten：告白。けれど・・・

「————ほおら、着いたぜ！」

その声を聞いた哀は下から前へ視線を移した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

2人は自分たちが暮らしている米花町を少し上から見下ろしていた。もうすぐ夜が明ける時間帯だから、空がほのかに明るくなっている。町の建物が、少しずつ光を受け始めていた。

「ここ、俺が数ヶ月前に見つけた秘密の場所なんだぜ。まだ誰にも教えてなかったから、連れてきたのはお前が最初。

・・・悪かったな、朝早くから。でも、夜明けの時間の方が綺麗じゃねえかと思ってよ」

コナンが町を眺めている灰原に優しい顔で言う。

「あら・・・夕日っていう手段もあると思うけど？」

くす、と笑って、哀はコナンの言葉にそう返した。

「・・・やーっと笑ってくれたな」

ふー、とコナンが息を吐く。「・・・え」と灰原が表情を変えた。

「ずっと笑ってなかっただろ？お前」

・・・やっぱり、何もかもお見通しのね。
少し居心地が悪いのか、それとも、分かってもらえていて嬉しいのか。

哀は思う。

「そ、それで・・・さあ、灰原」
ふいに、彼にしては珍しく歯切れの悪い声が聞こえてきた。

「・・・何かしら？」

少し疑問を抱きながらも言葉を返す。

「えーと、だから・・・その・・・」

「？」

「ああもう！だからだなあ！！」

俺・・・・・・・・灰原のこと・・・・・・・・

好きだ。

「・・・・・・・・・・は？」

今言われた言葉の意味が一瞬分からなくて、少し間拔けな声を出してしまう。

「ごめんなさい。もう一回」

「なっ、お、お前、今言ったこと何度も言わせるつもりか！！！！？」
コナンが顔を真っ赤にして言う。

「だ、だから・・・お、お前のことが・・・
・・・好きだって言ったんだよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

哀は、どうしても自分の表情が冷たくなってしまっていくのを感じた。
嬉しいのか、悲しいのか、自分はどうしたいのか、何も分からなくなる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふざけないで」

そして口をついて出てきたのは、拒絶の言葉。

「・・・・・・・・私は・・・・・・・・・・蘭さんの代わりじゃない」

だっ、と方向を変えて走り出す。

「え・・・・・・・・っ、灰原！俺は——」

後ろから今拒絶した者の声が聞こえても、哀は止まることはおろか振り向くこともなかった。

「・・・・・・・・・・はあ、はあ、はあ・・・・・・」
何処まで走ったんだろう。彼も流石に見失ったのか、後ろを向いても走ってくる姿は見えない。

「・・・・・・・・・・嫌われてしまったかしら」
何を言う。その方がいいと判断したから、自分は彼を拒絶したんじゃないか。

・・・・・・・・・・あら？

「・・・・・・・・・・。何処、かしら。ここ」
気付かなかった自分が笑えてきた。

うろうろとそこらを歩き回ってみる。そんなに長い時間は走っていないから、そんなに遠いわけでもないだろう。でも道が分からないと帰ることはできない。

「・・・・・・・・・・まさか迷うとはね・・・・・・道なんて考えず走ってたせいかしら・・・・・・・・・・!？」
がしっ。

ふいに後ろから抱え込まれる。

「な、何を「騒ぐなっ」

低い声。そんなにしつかりとは聞こえない。マスクか何かをつけているのか。

すると、この男は通り魔か強盗か、そんなところだろう。

思ったとき、いきなり視界にナイフが入り込んできた。ぐっ、と言おうとしていた言葉を飲み込む。

そのまま走られ、数分後には今自分が何処にいるのか、何処に向かうのかわからない状態になった。そして自分の力でナイフを奪うなんてことは無理。抜け出すことはできない。

ふいに倉庫のようなものが見え、男はそこへ入り込む。扉を閉め、そこでやっとな哀を離れた。

逃げようと立ち上がるが、そこらに落ちていたのだろうロープで手足を縛られる。

さっき通行人が見られなかったから人通りが少ないことは簡単に予想できるし、加えてここは音もあまりもれそうではない。恐らく叫んでも助けはこないだろう。

……江戸川君助けて……。

助けを求めることしかできない自分がなんとも情けない。

哀は男が携帯電話を取り出して何処かに電話をかけるのを見ているしかなかった。

T e n :: 告白。けれど・・・（後書き）

わーいわーい（棒読み）

哀さんに

「私は蘭さんの代わりじゃない」
と言わせてみたくて・・・。

きゃあ怒らないで皆さん・・・l l l o r z

哀に断らせました。一時的に。そして哀ピンチ。
でもコ哀にはします。ええ絶対に。o r z

文字数？気にしちゃいけません。

Eleven..from犯人(前書き)

誤字脱字、見つけた場合はお知らせしていただいてもよろしいでしょうか・・・。

Eleven..from犯人

どうしてこの道を通ったのかは、自分にも分からない。

「つく・・・何処行った灰原」

いるのはそんなに遠くではないはず。でも、あいつはここに来たことなかったよな・・・？

走れ走れ。とにかく本人の姿を見つけないと・・・。

そう思って十字路を曲がろうとした。そのとき、すぐ前に人影が見えた。このまま進めばぶつかることは誰でも分かるが、スピードがあつたため体は止まってくれない。

ど ん っ

「・・・っと！」

「悪い、大丈夫か・・・って、コナンじゃねえか!!！」

聞き覚えのある声がした。

上を向くと、視界の中にいるのは新一だった。相手も相当驚いているようで、どうしてここに、と聞かれる。だが、その問いに答えることなく口が言葉を放った。

「新一！灰原！灰原見なかったか!？」

「え・・・」

別に期待していたわけではないけれど、実際に言われるのは悲しいものだ。

もちろん、答えはNOである。

新一は電話で警察に協力してほしいと頼まれて、それがこの近くだったらしい。車で送る、とは言われたものの、断って家に帰る途中だった。

そこまではいい。

「・・・コナン、茶色の帽子被っててマスクしてるやつ、見なかったか？」

途中、銀行強盗に出くわしてしまったそうさ。

そんなに経っていなかったそうだから、警察も騒ぎを聞きつけて犯人グループを逮捕した。5人中、4人だが。

「・・・その1人に逃げられたってのか！？何やってんだよ一体！ここの近くってことは灰原が出くわしちまってるかもしれねえじゃねえか！！」

「だから今探してんだろ！」

「なんで食い止めなかったんだよ阿呆！」

「しかたねえだろ！もう1人逃げ出そうとしたやつがいて、そっちを押さえ込んでたんだよ！」

「・・・言い争いをしている暇がないことなどこの2人にも分かっている。」

そのとき、新一の携帯電話が鳴った。

相手が誰なのかは分からない。少なくとも、新一やコナンの知り合いからのものではなかった。

「・・・・・・・・・・はい」

『工藤新一か？』

電話越しに聞こえる声は、何処かこもっているように感じる。つまり、マスクか何かをしているということになる。

さっきの逃げた犯人の可能性が高いか、と新一が思ったとき、また犯人が言葉を発してきた。

『・・・・先ほどお前たちに仲間を逮捕されたが、このままで終わると思うなよ』

やっばりか。

コナンに目で犯人であることを訴え、ただの気まぐれで電話をしてきたわけもないだろう、犯人は用件があるはずだ。

「仲間の解放ですか？」

言うど、『話が早いな』と返ってくる。

『仲間の解放。それと、金を返してもらおうぞ』

後ろからバタバタと走る音がして振り向いた。佐藤・高木・白鳥・

日暮の4人が視界に入る。

警察が来た。なら犯人に従う振りをして警察と犯人確保が一番いい手だと、この時点では誰もが思うだろう。

しかし、

『断ることはできないぞ。さっきそこらにいた赤毛の女の子を人質にとってるんだからな』

こう言われれば話は別だ。

「人質！？しかも赤毛の女子だって!？」

その人質には当てがある。しかもコナンが探している人物。そのせいか、思わず声が大きくなってしまった。

「赤毛の女子だって!？おい新一、まさかそれって灰原じゃ——」

『なんだ？ガキがいるのか？』

焦りから来たコナンの大きめな声は犯人にも聞こえてしまったらしい。……こういう場合に犯人が考えることを想像するなんてたやすいことだ。

『ちょうどいい。そのガキに金を持ってこさせろ。場所はこっちから指定する。一応言っておくが、人質に怪我をさせたくないなら警察が後ろにくっついてくるなんてマネは絶対にするなよ』

「な……。子供にそんな危険なことを「行かせろ」

新一の言葉をさえぎったのは、驚くほど静かなコナンの声だった。

Eleven..from犯人(後書き)

えー・・・まず、です。

ごめんなさいorz

何日間放置してるんだって話ですね・・・。

コナンさん、周りの反対を押し切って犯人の要求をのんじやいましたね。全ては哀さんのため！頑張ってくださいコナン君。
大丈夫。犯人は君がスーパー小学生だなんて知らないから。多分、まあ、大丈夫でしょう。

読んでくださった方、感謝感謝です！ありがとうございます！

T w e l v e : : 事件の解決へ . . . (前書き)

誤字脱字を見かけたら (r y

いつもですが、期待だけはしないでください . . . 。今回は本当に期待をされると困ります o r z

Twelve..事件の解決へ・・・

電話の会話で、男が強盗で捕まりそうになり、逃げてきたのだということが予想できる。

ロープで手足を縛られた哀はなんとか縄を抜けようと手を動かしてはいたが、結局戒めからまだ抜け出せないでいた。

『赤毛の女子だって!?!』

その声に、思わず下向きになっていた顔を上げてしまった。

・・・・江戸川君だ・・・・・・。

「ちょうどいい。そいつに金を持ってこさせろ」
え？

・・・彼は来いと言われれば来るだろう。人質が傷つくというのならなんだってやる。

でも、それはつまり・・・・・・。

『行かせろ』

ふいに、静かな声が聞こえた。犯人はその口調に少し驚いた表情をしている。

ああ、やっぱり彼は来るんだ。

やめてほしい

助けてほしい

どちらなのか自分には分からない。

……けれど、彼は傷ついてはいけない。自分がどうなるとしても、彼を傷つけていい理由にはならない。

——自分の感情など、二の次だ。

だから、私は電話に向かって叫ぶ。

「駄目よ江戸川君！来たってどうにもならないことくらい貴方だつて分かつてるでしょう！！死人が1人増えるだけよ！！」

大声を出しても助けは来そうにないところだから、犯人は哀の口を塞いだりすることはなかった。それが今は幸いしている。

「うるさい！」

しかし犯人はこれ以上騒がれるのは面倒だと判断したのか、哀の口にガムテープをはった。

「んゝ！！」

江戸川君は来ちゃいけない。なのに……。

哀は助けってもらうことしかできない自分を責める。

「……金は20分以内に持ってきてもらおう。場所は……」

ごめんなさい……。

犯人からの電話が終わったのか、新一が電話の電源を切る。

「・・・・・・・・コナン。お前、本当に行く気か？」

言われるだろう、とは思ってはいた。けれど、自分のせいで灰原が傷ついてしまうというのは嫌だ。彼女には幸せになってほしい。こんな形で、傷ついて終わってほしくない。

「当たり前だろ！俺が行かねえと灰原が危険な目にあっちまうんだぞ！？それを——」
「もしお前が傷ついたら」

今度は新一がコナンの言葉をさえぎる。

「・・・お前が傷ついたら、きっと灰原は自分のせいだと言って自分だけを責め立てる。そこらへんはずっというお前の方が分かっているだろ？」

・・・・・・・・。。。

新一の言っていることは何一つ間違っていない。彼女が自分を責めるのは、悲しいけれど事実なのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・でも」

だから行かないというのは、

「そんなの俺が自分を許せねえ」

絶対に灰原をつれて帰ってきてやる。俺が傷つけば灰原が悲しむってんなら。

「・・・怪我さえしなきゃいいんだろ」

「要するによ！そうだろ？」と言って笑う。新一も呆れ交じりの笑みを返してくる。

ぱっと満面の笑みに変わり、ぽふっと頭に手を乗っけてきた。

「・・・よし！それでこそ江戸川コナンだ！！」

なんだよ。俺に行かせない気なんてさらさらなかったんじゃないか。

「・・・だが、いくらなんでも危険だろう」

目暮警部が声をかけてくる。

「ええ。だからコナンには麻醉銃やキック力増強シューズを装備してもらおうかと思います。」

・・・まあ、言われなくても持っていくでしょうが」

ふっ、と新一はコナンを見て笑う。

まず、警察たちはコナンの後ろに距離を置いて着いていく。
コナンは犯人を道具でひるませ、そこで自分たちが突入する。そしてコナンは灰原を保護。

そんな流れでいくことになった。

20分後

指定された場所にコナンが足を踏み入れる。両手には盗まれた金が入っているだろうバッグ。

来るなどと言いたい。けれど、さっき倉庫内ではられたガムテープは取られていない。叫びたくても叫べない状態だった。

どうして来たの。

貴方が傷つくだけでしょう。

私は貴方を傷つけない。

私ならどうなってもいいから、貴方は傷つかないで。

言いたい言葉はたくさんある。実際、手をおさえられていなければ自分は叫んでいるところだ。

「……まず灰原を離してもらいたい」
コナンが犯人に要求する。

「……じゃあ、バッグをこっちに置いて、それからまた下がって
もらおうか」

コナンが言われたとおりにすると、犯人が灰原を放し、バッグの身を調べ始めた。

――！

哀が視線を前に向けると、コナンがキック力増強シューズに手をかけている。

数秒後には、もうサッカーボールを蹴ろうとしているところにまであっていた。

「食らいやがれ！！！」

ド　カ　ア　ッ　！！

「！？」

犯人が何事かと顔を上げるが、それは逆効果と言うもの。当然、ボールは顔にあたる。

「逮捕だ！！！」

目暮警部の声がして、佐藤刑事たち3人が走ってきた。

「・・・・・・？」

コナンもこっちに走ってきている。哀は少々驚いたが、それ以上に驚くことが起こった。

「えー！？ちよっと、江戸川君？！」

「よし、連れて行くぞ！」

警察4人が犯人を署に連行する。そのとき、全員がコナンと哀に様々な種類の視線を向けたことに、新一も哀も気がついていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・えーと、江戸川君」

「あ？なんだ灰原」

「コナン・・・・・・・・お前、自覚なしか？」

恐ろしいやつ、と新一が呟く理由が、コナンには分からなかったらしい。

「あの・・・・・・・・おろして」

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・！！わ、わりい灰原！」

ちなみに、コナンはさつきから哀を横抱きをしている。

まあ、違う言い方をすれば・・・・そう、「お姫様抱っこ」というやつで。

おろされるまでの数分間、哀は「恥ずかしい」とか「でもまんざらでもない自分が情けない」とかいう感情に耐えなければいけなかった。らしい。

そのせいでコナンは新一にからかわれながら帰ったとか何とか。

T w e l v e : : 事件の解決へ . . . (後書き)

どうもです。如月です。

コナンさんにとっては哀を横抱きしても違和感などまったくありません。それほど好きなんですよきっと。

読んで下さった方、ありがとうございました！

えー . . . 題名の「≠」というのはなんて読むのかという質問があったのですが . . . 。

調べ方が悪いのか何なのか . . . 。分かりませんでしたorz

私的には「ノットイコール」かなあ . . . 。と思ってます。

でも、ただカッコつけようとして玉碎してしまった名前なので、読みたいように読んでくれて構いません。

というか、誰か正しい読み方知っている人教えてください . . . 1

l l o r z

Thirteen: 新一さんのお悩み相談室（前書き）

更新がストップしてすみませんでしたorz

コ↓哀続きです ねlllorz 苦手な方はすみません本当に・・・。

Thirteen: 新一さんのお悩み相談室

「・・・・・・・・・・。」

だっ広い部屋の中で1人、黙りこくっている青年がいる。

彼の名は工藤新一。江戸川コナンという少年と同居中。

彼が黙りこくっている理由というのは、「あの」事件以来、江戸川コナンとそのクラスメイト灰原哀がどうもぎくしゃくしているというか、そんな雰囲気ですれ違ったりしたとき感じ取ったからだだった。一体何があったんだろうか。

『どうしてコナンは灰原を探してたんだ？』

事件解決の後、家に帰ってコナンに聞いてみると、彼は深くため息をついて自室に入っていた。・・・夕食の時間がくるまで、ずっと部屋に閉じこもっていたっけ。

※因みに、夕食を作ってくれたのは蘭だ。最近いなかったのは、確か園子と一緒にどこか行ってたからだだったよな。・・・あれ？両親と一緒にだったか？だから俺が行けなかったんだっけ？おっちゃん、俺と一緒に行きたいなんて思わないだろうしなあ。

帰ってきたのは事件が起きる前日。それまで蘭がいない部屋はめちゃくちゃ広く感じた・・・。

・・・とにかく、コナンに「夕食ができたぞー」、と伝えるためにドアを開けて部屋の中をうかがってみると、ベッドの上でどんよりしてるコナンがいたのを覚えている。

「・・・いちー。聞いてるー？新一ー？」

不意に、隣から蘭の声が聞こえた。さっきからずっと呼んでいたらしい。

「ん、ああ、悪い悪い。なんだ蘭？」

「・・・さっきからずーっと黙ってるけど、どうかしたの？」

新一は蘭に隠しておくべきか話してみるべきか一瞬考え、結局「話す」という選択肢を選ぶ。

「・・・なあ蘭。最近、コナンと灰原おかしくねえか？」

「えー、そう？」と答えるんだろうなと思っていたため、

「あれ、新一もそう思う？」

と言われたときには正直驚いた。

「確かにコナン君と哀ちゃん、この頃ちょっと変なのよね。」

悩みとかがあるんなら、話してくれば解決できるかもしれないんだけどな・・・」

今日は月曜日、時間は5時を過ぎたところである。

つまり、そろそろ彼が学校から帰ってくるわけだ。何があったのか聞いておきたいところではあるのだが・・・。

「ただいま・・・」

ガチャ、というドアの音とコナンの声が耳に入ってくる。

「ああ、お帰りコナン」

「おかえり、コナン君。」

・・・この頃疲れてるみたいだけど、どうかしたの？何か悩みでもあるんだったら相談にのれるよ？

私にはちよっと聞かれたくないっていう内容だったら、私、外に出てるから」

「そうだな。あまり溜め込むと体に悪いし、どうしても言えないこ

とじゃないなら、話したほうが楽になるぞ」

2人が言うのと、コナンはちよつと申し訳なさそうな顔をした。

「……………えーつと……………悪いんだけど、蘭姉ちゃんにはあまり聞かれたくはない、かなあ……………ご、ごめんね」

「ううん、大丈夫だよ。じゃあ、私は外に行ってるね。そうだ、買い物に行かなきゃ。確か冷蔵庫の中身、あまり残ってなかったから」コナンの言葉に蘭は笑顔で答える。「じゃあ新一、コナン君のことお願いね」と言い、買い物に出かけていった。

「……………お前、蘭に感謝しとけよ。色々と氣遣ってくれてるんだからな」

「言われなくても分かってるっての。感謝してる」

「しかし、お前本当に何があったんだ？ つーか、蘭に聞かれたくないってどんな話だよ」

「……………それがよ……………」

よろよろと自分の方へ向かってくるコナンを見て、新一は一体何があったのか、と思うほかなかった。

コナンは今までのことを話した。主な内容は哀に告白したとか、「私は蘭さんの代わりじゃない」と言われてしまったことなどだ。それ以来、彼女と接触するとどうもぎくしゃくしてしまっていたらしい。

「んー、つまり、

灰原に告白↓返事は「私は蘭さんの代わりじゃない」↓灰原が逃げ

る↓例の事件に巻き込まれてたらしい↓救出

「……って感じの流れだったわけか？あのときは」

コナンが話し終わった後、新一が内容を整理したかったのか聞いてきた。それにコナンは頷いた。

「どうすりゃいいのかなあ、って思ってたよ……」

コナンが言う。いつの間にか、彼はテーブルに突っ伏していた。

「んー……。お前は灰原のことを蘭の代わりだなんて思っ
てないんだろ？」

「当たり前だろ。なんで俺がそんなこと考えなきゃいけないだよ。
あいつはあいつだ」

「……ならいいじゃねえか」

「は？」

新一の言葉に、コナンは思わず顔を上げる。

「簡単なことだろ。お前は灰原が好き。でも灰原は誤解してる。な
ら、誤解だって言えればいいだろ。自分はそんなこと思っ
てないって、説明すりゃいい」

「んなことで解決するならもうとっくの昔に……」

「でも、試したわけじゃないんだろ？ならやってみる価値はあるじ
ゃねえか」

「……」

新一の言葉を聞いて、コナンは黙り込んだ。

確かに簡単に実行できるものじゃないだろうし、もし信じてもらえ
なかったら、という不安は付きまとうものなんだろうと新一も思う。

「灰原は信じてくれるって、信じてみたらどうだ？好きなやつのも
とも信じられねえなんてカッコ悪いぞ？」

コナンがその言葉を聞いて一瞬考えた後、決心したのか立ち上がった。

「行ってこい。待っててやっからよ」
新一が言う。

「おう。ありがとな、新一」
コナンが笑い、それからすぐ玄関へ向かう。

ボタンとドアが閉じて、コナンが走っていったのを見届けると、新一はふと呟いた。

「しかし・・・もうあいつもそういう年頃かよ」

Thirteen: 新一さんのお悩み相談室（後書き）

読んでくださった方々、ありがとうございました！コ↓哀続きな如月です。

前書きにも書きましたが、本当に更新が亀並みですみません……。なるべく途切れないようにしなくてはliliorzllil
新一がなんでもないように言っちゃってますが、やっぱりそう簡単にはいかないんでしょうかね？orz
というかこれはコ哀に入るんでしょうか……。；；

今回はコ↑哀風味になりそうなのかなあという感じです。更新途切れないように頑張ります……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9477a/>

≠

2011年1月3日18時50分発行